フィールドにおける「指揮」の相互行為的達成
Interactional achievement of ‘directing’ actions in the field

榎本 美香[1], 伝 康晴[2]
Mika Enomoto[1], Yasuharu Den[2]

[1]東京工科大学メディア学部, [2]千葉大学文学部
[1]School of Media Science, Tokyo University of Technology, [2]Faculty of Letters, Chiba University
menomoto@stf.teu.ac.jp, den@cogsci.L.chiba-u.ac.jp

Abstract
The purpose of this study is to examine ‘directing’ actions in the field, which are acheved not only by one director who has the authority but also by other participants who assist the director. In our field data, a large number of participants collaboratively drag huge trees from a forest to the bottom of a hill, and from a mountain to a village. Our analyses reveal that persons who have appropriate right to direct the group, e.g., predecessors and successors of the director, sometimes support or substitute the director’s role. In this way, directing actions in the field are acheved through interaction between the director and some participants near to him.

Keywords — Direction, interactional achievement, authority of direction, speech act, field

1. はじめに

榎本・伝 (2013)では、指揮者（委員長）と指揮される者たち（引き手たち）が以下の発話連鎖により、長さ10間（約18メートル）もの木を林からゲレンデ下へ引き出すという行動を開始することをみた。

【断片1】

01	委員長:	このまんま:まっすぐ バックさせるからな=	[移動目標の提示]
02	一同:	=お:い	[移動目標の受諾]
03	委員長:	行くよ:=	[行動開始の指令]
04	一同:	=お:い=	[指令の受諾]
05	委員長:	=せーの=	[行動遂行の号令]
06	一同:	((ロープを引きながら)) =よいしょ	[行動遂行と合いの手]

ここで参与者らが目指しているのは、この大木をゲレンデ下まで引き下ろすことである。委員長と引き手たちはこの行動を最後までやり遂げねばならない。この例で言えば、一端、根元方向へ木を引いた後、枝先部分を回転させて林の出口からゲレンデへ出し、そのまま下降してゲレンデ下へ木を運搬する。この間、委員長は直近の移動目標を提示したり、ロープを引く方向を提示したりし、引き手たちはそれを受諾しながら木を引き下ろす。「指揮」はこの区間全体を指すものとする。その中で指令や号令という言語行為が発され、その内容が遂行される。すなわち、木の引き出しの指揮という大局的構造の中に、個々の指示や指令を行う局所的構造として言語行為が含まれる。

Searle (1969)はAustin (1962)の言語行為論の適切性条件を詳細化し、正常入出力条件・命題内容条件・事前条件・誠実性条件・本質条件に整理している。たとえば「指令」「命令」のような言語行為では、示された行為の遂行に必要な能力を聞き手が持っている（と話し手が信じている）ことや、話し手が聞き手に対して権威のある地位にいることが事前条件として必要である。この例でも、「引き手たちは示された方向にロープを引けば木を動かす能力を持っており、それを委員長も信じている」「委員長は木の引き出しの指示や指令を行うという権威を担う地位にいる」という事前条件が揃っている。ただし、聞き手たちの能力は個々の指令が発される都度確保していかれるものであるのに対し、指令者の権威は予め決定された委員長という役割に付随するものであり、指揮という大局的構造において不動である。

しかし、大木をある地点まで運搬する過程には、様々な問題がひそんでいる。木の進行方向に障害物もあれば、引き手たちがロープをどう引けば良いのか分かっていない時もある。委員長ひとりが解決策を全知できるわけでもない。本稿では、現実世界における身体的行為の遂行に際して生じる様々な問題に対し、指揮者の権威がどのように尊重されたり介入されたりするのかを分析する。そして、指揮という大局的構造において、局所的な指令が相互行為的に達成されていくことを示す。

2. 分析資料

■収録場所 長野県下高井郡野沢温泉村

■収録日時 2012年10月6–7日、2013年1月12–16日

■収録場面 道祖神祭りに関わる準備作業の場面。社殿と呼ばれる高さ10数メートル、広さ8メートルの社を1月15日の正午までに完成させるために行われる様々な所作を収録対象とした。10月の収録では、社殿の材料となる木材を山で伐採・引き

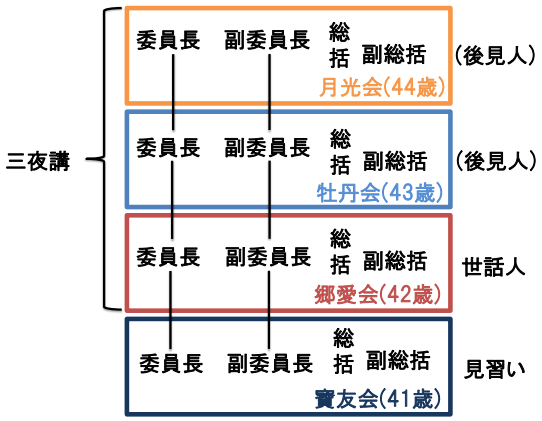

図 1 「三夜講」の構成員

出すという場面を中心に収録している。1月の収録では、社殿の芯木となる木を山から引き出し、10月に切り出してあった木と共に組み立てるという作業を中心に収録している。

■分析場面 本研究では、社殿の芯木となる「御神木」の伐採場所からゲレンデ下への引き出し（10月7日8:28–9:21）、「御神木」のゲレンデから村内への里曳き（1月13日12:40–16:50）の2場面を分析対象とする。

■参与者 この祭りの準備作業は「三夜講」と呼ばれる数え年42歳に連なる3学年（各学年30名程度）の男性が3年間行う。たとえば、2010年度に数え年42歳・41歳・40歳で編成された三夜講は、この3学年で2012年度までの3年間この祭りの準備に携わるが、準備作業の中心となるのは42歳の世話人である。収録した年は、三夜講3年目であり、最年少組の郷愛会が世話人として祭りの準備作業の総責任を負う年であった（図1参照）。次年度には三夜講のメンバーが総入れ替えになるため、次期三夜講の年長組である寶友会が見習いとして参加していた。世話人をすでに終えた43歳の牡丹会、44歳の月光会は後見人的な立場でこれに加わった。これに加え、引き出しや里曳きといった主たる行事には25歳厄年の元会が加わった。

各会において、道祖神委員長・道祖神副委員長・総括・副総括・事務局長と呼ばれる5役と道具長・縄長・桁長・運搬長・ぼや長・帳付けという役職が各人に割り振られており、役職に応じた責務と権限を担う。各会において同一の役職にある者は、年齢の上下関係に応じて兄弟関係にある。上の学年の役職の者は下の学年の者に役職ごとの職務を伝授することとなっている。この年最大の権限が与えられているのは世話人である郷愛会の委員長であり、年長者の委員長らは郷愛会委員長の補助を行う。また、この3学年の委員長たちが、見習いの寶友会委員長に対し様々な教示と指導を行う。副委員長は委員長に次ぐ権限が与えられており、伝授の方式は同様である。10月の引き出しでは、郷愛会の委員長が指揮者である。1月の里曳きは2本の御神木に対して、郷愛会の委員長、副委員長がそれぞれ指揮権を担う。

3. 分析

3.1 尊重される指揮権

まず、委員長の指揮権が尊重されている事例を分析する。

断片2は断片1の直後のやりとりである。この御神木は世話人である郷愛会と一つ年上の牡丹会によって引き出される。指揮権は郷愛会の委員長にあるが、これを牡丹会の委員長（以下「牡丹委員長」）が補佐する。二度目の「よいしょ」(08) に伴う動作により、御神木が切り株にあたる。この「よいしょ」が開始されるとほぼ同時に、牡丹委員長が手を上げて制止のジェスチャーをし (09)（図2 (a)–(b))、委員長の方へそのジェスチャーのまま駆け寄りながら（図2 (c)）「止まれ止まれ止まれ」という (10)。委員長が次の「せーの」を言うかわりに牡丹委員長の方へ歩み寄ることにより (11)、木の動きが止まる。

【断片2】
07 委員長: せーの
08 一同: ((ロープを引きながら))
[よいしょ
09 牡丹委員長: [((手を挙げて止まれのジェスチャー))
10 牡丹委員長: ((委員長に向かって走り寄りながら))
止まれ止まれ止まれ.
11 委員長: ((牡丹委員長の方へ行く))

ここで興味深いのは、「よいしょ」(08) が開始された段階で牡丹委員長が制止動作に入っているということは、その時点で御神木が切り株に接触することはすでに予期されているという点である。この時点で直接引き手たちに向かって停止命令を発することも可能だったはずである。にも関わらず、牡丹委員長は委員長に木を引かせるのを止めさせろと言うのである。御神木が切り株に引っかかることや、その結果引き手たちが余分に木を移動させなければならなくなることよりも、全体を指揮して木を止めるのは委員長の行うべきこととしてその権限が尊重されているのである。

断片3は1月の御神木里曳きで、雪山から下ろしてきた御神木が村に入るところで、ゲタソリと呼ばれるソリを3箇所付けられるシーンである。里曳きは委員長組と副委員長組の2組2ルートで行われ、断片3では副委員長を指揮者とし、その見習いである寶友会副委員長らが付いている。また、月光会と牡丹会の数名がこれを補佐する。

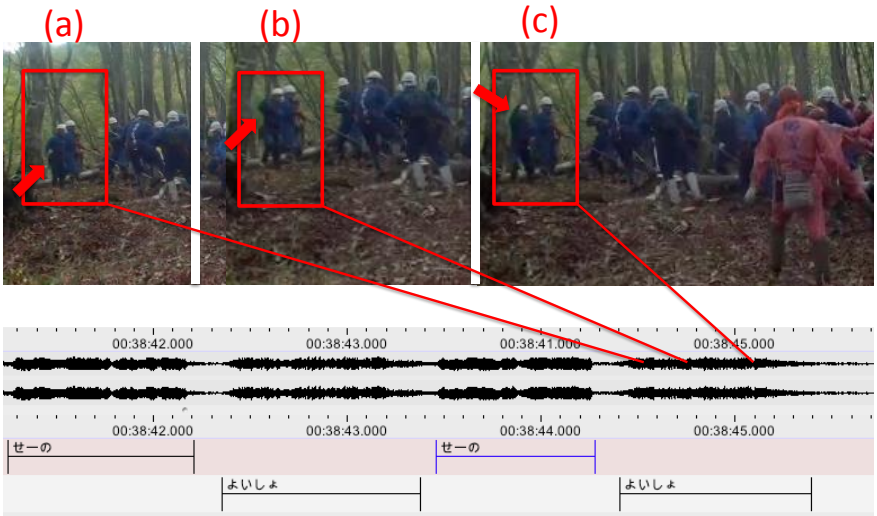

図 2　「よいしょ」間に開始される制止動作

【断片3】

101 副委員長:　いくど:
102 一同:　はーい
103 寶友副委員長:　[((ソリに手を添える))
104 牡丹1:　[((ソリに手を添える))
105 副委員長:　せーの
106 一同:　((木を上げながら))
　よいしょ
107 月光１:　もっと押せもっと押せ
　もっと押せもっと押せ
108 月光１:　も[っともっともっと
109 副委員長:　[もっともっと
110 寶友副委員長ら:　((ソリを動かす))
111 寶友副委員長ら:　((ソリが木に挟まり動かない))
112 月光副委員長:　もっと
113 月光副委員長:　もうちょい
114 寶友副委員長:　(ちょーかい)もうちょい
　上げてください
115 副委員長:　行くど:
116 副委員長:　もう一回行くど:
117 一同:　はーい
118 副委員長:　せーの
119 一同:　よいしょ
120 寶友副委員長ら:　((ソリを動かす))
121 不明:　下入れろ下
122 寶友副委員長ら:　((ソリを木の下に押し込むも
　動かない))
123 寶友副委員長:　もっかい上げてください
　すんませーん
124 不明:　ちょっと頑張ってくれ:
125 副委員長:　いいか:
126 副委員長:　分かったいいか:
127 副委員長:　いくど:
128 副委員長:　せーの
129 一同:　よいしょい
130 寶友副委員長ら:　((ソリを押し込む))
131 不明:　(ようちゃん)そっち
　あんまり入れると:
132 副委員長:　はいありがと:

3箇所に配置されたゲタソリの上に一端御神木を乗せたものの、中央のソリの位置が前過ぎたため、後ろに移動させるというシーンである。木の先端から中央付近までを上げ、ゲタソリを後方へスライドさせる必要がある。副委員長の掛け声（105）で木が引っぱり上げられ、見習いである寶友副委員長と牡丹会の一人がソリを後方へスライドさせる（110）。月光会の一人がさらにソリを後ろへ動かすよう指示するが（112, 113）、木の下に挟まって動かない。ここで、寶友副委員長は副委員長に向かって、「もうちょい上げてください」と木を皆で上へ上げるよう依頼する（114）。これを受け、副委員長は「行くど:」「もう一回行くど:」という指令（115, 116）と「せーの」という掛け声（118）をかけて、周囲の者に木を上げさせている。ソリが動かされるがさらに「下入れろ下」という声が飛ぶ（121）。寶友副委員長は再度「もっかい上げてくださいすんませーん」と副委員長に頼む（123）。これを受け、副委員長は「いいか:」と全体に声をかけ（125）、寶友副委員長にむかって「分かった」と言った後、さらに全体に「いいか:」と声をかけ（126）、「いくど:」の指令（127）と「せーの」の号令（128）に至っている。

この御神木の里曳きを指揮する権限は副委員長にあり、見習いである寶友副委員長にはその権限がない。ソリを動かすためには木を皆で上に引っ張り上げるための指令が必要である。そこで、寶友副委員長は副委員長に対し、それを依頼するという形をとる。123の発話で「すんませーん」という謝罪が付与されていることは、本来は木の操作の内容（もう一回上げる）を示すことも指揮に含まれるが、それを指揮の権限を持たない者から申し出るという好ましくないことを行っていることを標示しているとみなせる。

3.2 介入される指揮権

次に、元来の指揮者ではなく他の者がこの権限を代行する事例を分析する。

断片4は10月の御神木2本目の引き出しにおけるやりとりである[1]。この引き出しの指揮権は見習いである寶友会の委員長（以下「寶友委員長」）が取り、三夜講最年長組である月光会の委員長（以下「月光委員長」）がこれを補佐する。この他、数名の月光会メンバーも引き出しを補佐している。引き手は、寶友会と25歳の元会である。

【断片4】
201 月光委員長: 正和声かけて:いいか:(.)後ろの人も
できてるかどうかちゃんと途中の
人に聞いて:(.)で良かったら(.)
いいか:(.)(…)
202 寶友委員長: 真ん中の人準備いいかい?
203 寶友一同: はいよ:
204 寶友委員長: 後ろの人はどうだい?
205 寶友一同: はーい
206 寶友委員長: ほいじゃ一端前に出しま:す
207 寶友一同: はーい
208 寶友委員長: せーのでこ(.)えかけていきますんで:
209 寶友一同: <笑>
210 寶友委員長: よろしくお願いします
211 寶友一同: はい
212 寶友委員長: いいか:い
213 月光委員長: あ委員長あぶねえあぶねえ(.)
これ真っ直ぐこっちダメ(.)こっちだ
214 寶友委員長: ((右手に移動して))
ほいじゃいくぜ:
215 一同: はーい
216 寶友委員長: せーの
217 一同: ((縄を引きながら))
よいしょ
218 ((木の頭が茂みから飛び出す))
219 見物客一同: おお
220 寶友委員長: ストップ
221 月光委員長: ちょっと前で離れてていや(.)
少し(.)しばらく(.)飛ぶから(.)
あぶねから(.)そこ(.)誰だっつんだけな
222 月光委員長: とりあえず突っ切った方がいいよ
223 寶友委員長: (もう少し)行くぜ:
224 寶友委員長: せーの
225 一同: ((縄を引きながら))
よいしょ
226 ((動きが止まる))
227 寶友委員長: せーの
228 一同: ((縄を引きながら))
よいしょ
229 ((動きが止まる))
230 寶友委員長: 寶友会前へつけ
231 寶友一同: はい
232 寶友委員長: いいか:い
233 不明: はいよ:
234 寶友委員長: せーの
235 一同: ((縄を引きながら))
よいしょ
236 ((動きが止まる))
237 月光委員長: おい声出せよ
238 寶友委員長: 真ん中どうだい大丈夫か:
239 月光会３: 足場確保しとけ:
240 不明: 足場いい?
241 元１: ちょっと待って下さい
242 元２: ちょっと待って下さい
243 寶友委員長: はい
244 一同: オッケー
245 寶友委員長: はい
246 寶友委員長: そいじゃ行きま:す
247 一同: あーい
248 寶友委員長: せーの
249 一同: ((縄を引きながら))
よいしょ
250 寶友委員長: いいか?足
251 寶友委員長: 行くぞ:
252 一同: あーい
253 寶友委員長: せーの
254 一同: ((縄を引きながら))
よいしょ
255 ((動きが止まる))

この場面は、寶友委員長が初めて指揮をとる場面である。月光委員長の助言（201）を受けた寶友委員長は、真ん中の人、後ろの人と準備ができたかを確認し（202, 204）、引き出しを開始しようとする。しかし寶友委員長の立っている位置は木の移動先であったため、「あ委員長あぶねえあぶねえ(.)これ真っ直ぐこっちダメ(.)こっちだ」と注意されたり（213）、木の先端付近にいる引き手たちに「ちょっと前で離れてていや(.)少し(.)しばらく(.)飛ぶから(.)あぶねから」と月光委員長が直接指示を出したりする（221）。寶友委員長が各自の引き手がどのように引けば良いのか指示しないまま、行動を開始しようとするため、月光委員長にしてみれば危ぶまれて仕方ないのであろう。

この少し後、断片5では寶友委員長から月光委員長に指揮者が交替する。寶友委員長が木の頭を上へ振るという「移動目標の提示」を早すぎる段階でしかけたとき（302）、月光委員長は全体に向かって「まだ頭振らねえから:」と指揮の修復を自ら実行する（305）。この辺りから木の真ん中付近にいた月光会の引き手が直接月光委員長に移動方向を訊ねだし（308）、月光委員長と月光会の引き手が口々に寶友会と元会の引き手たちに指示を出す（312–338）。ただし、月光会引き手の指示の相手は、寶友会と元会の引き手たちであって、寶友委員長に対してではないことにも注目しておきたい。

【断片5】
301 寶友委員長: ストップ
302 寶友委員長: じゃこれで頭
303 寶友委員長: あ止まれ
304 一同: <笑>
305 月光委員長: ((全体に向かって))
まだ頭振らねえから:(.)
[向こうまで出て[:
306 月光５: [うん [うん
307 月光委員長: でこっちから下へ(.)
ここ(.)ここまで来たら下行くから
308 月光５: ここ抜けるんか?
309 月光委員長: これここ抜けよ

[1] 人名は仮名

310 月光委員長: だから下の人は上へ(.)上へやんべえや
311 寶友６: はい
312 月光委員長: 下にいる人は上へ上がってくれ:
313 不明: はい
((中略))
327 月光委員長: したらもうこっちくる
328 月光委員長: いやもうこっちがわいいから
329 月光委員長: 今度こっちがわから
330 月光委員長: で(.)半分からそっちは上
331 一同: はい
332 月光委員長: そう
333 月光６: 間上へついてべっとこう上げろ(.)
木の上へつけ
334 月光６: [寶友会(.)さきっちょ上へつけ(.)
さきっちょ上上上
335 月光委員長: [(…)を中心に(.)こういう風に(.)
こういう風に
336 月光委員長: もう一本そこに木あの(紐まける)
337 月光６: 上へついて引っ張れ
338 寶友一同: はい
339 月光委員長: いいか(.)じゃ正和ちょっと
俺についてろ
340 寶友委員長: はい
341 月光委員長: 行くよっ
342 一同: はい
343 月光委員長: せーの
344 一同: ((縄を引きながら))
よいしょ
((中略))
370 月光委員長: よしこれでいける(.)
371 月光委員長: じゃ正和[(.)ここでおめえ(の出番)
つるつるってみ
372 寶友委員長: [はい

木の移動を開始するにあたって、月光委員長は「いいか(.)じゃ正和ちょっと俺についてろ」(339)(「正和」は寶友委員長の名前)としばらく指揮権を引き受ける申し出をする。そして、難しい木の旋回が終了した時点で、指揮権を再度寶友委員長に戻す発言を行なっている(371)。

月光委員長は現三夜講の最年長組の委員長であり、郷愛会の委員長が居ない場合は指揮権をとる権限をもつ。そして、次年度から三夜講になる寶友会はこの年は修行期間であり、試しに指揮権を委ねられたという状況がある。このことから、引き出しが難しい局面になる直前に、月光委員長が指揮権を交替したと考えられる。しかし、交替の申し出「いいか(.)じゃ正和ちょっと俺についてろ」(339)や指揮権の返上「じゃ正和(.)ここでおめえ(の出番)つるつるってみ」(371)が明示的に言及されていることから、指揮権が本来は寶友委員長にあるということに月光委員長も志向していることを示していると言える。

次の断片6は、1月の御神木里曳きにおいて、委員長の引く木と副委員長の引く木が出会い、2本を横並びにする場面である。副委員長が引いてきた木を委員長の木の隣に並べなければならない。ここでの指揮者は副委員長であり、引き手は牡丹会数名と元会である。ただし、委員長組と出会っているため、側には委員長、牡丹委員長がいる。

【断片6】
401 副委員長: ちょうどいくど:
402 元一同: はい/お:い/は:い
403 副委員長: 行くど:
404 元一同: ((ロープを引き))
よいさのさ
405 副委員長: よいさ
406 元一同: ((ロープを引き))
よいさ
407 元一同: ((ロープを引き))
よいさ
408 副委員長: よいさ
409 元一同: ((ロープを引き))
よいさ
410 副委員長: よいさ
411 元一同: ((ロープを引き))
よいさ
412 副委員長: よいさ
413 元一同: ((ロープを引き))
よーい
414 牡丹委員長: ((先頭付近の牡丹引き手に向かい))
止まれ
415 牡丹委員長: それで除けといて
こっちの奥御神木前にUターン
416 副委員長: こっちを先頭にってことだな:?
417 委員長: [((頷く))
418 牡丹委員長: [そうそうそうこっち頭で
419 副委員長: 行くど:
420 副委員長: いいか:
421 元一同: お:い/は:い/オッケーです
422 副委員長: 行くぞ:
423 元一同: お:ーい
424 副委員長: こっち方面ゆっくりな:
425 副委員長: つる:っと
426 元一同: ((ロープを引っ張って走りながら))
よいやさのさ:
427 元一同: ((ロープを引っ張って走り続ける))
428 委員長: 止まれ:
429 元一同: よいしょ
430 委員長: ((元会の一人を手で止める))
431 委員長: ((副委員長に制止のジェスチャー))
432 副委員長: ((委員長の方へ寄ってくる))
433 委員長: ((副委員長の方へ向かっていく))

副委員長の指令「行くど:」(403)の直後に、元会の引き手たちは「よいさのさ」とすでにロープを引きはじめる(404)。本来ならば、ここで副委員長の「よいさ」という行動開始の号令がかかるのであるが、それが待たれていない。また、「よいさ」の引き(406)の後も止まることなく次の「よいさ」を元会が続けロープを引き続ける(407)。この結果、木が急激に動く。そこで、木の先頭付近の引き手をしている牡丹会の数名に向かい、牡丹委員長が「止まれ」と制止をかけることによって、全体が止まる(414)。

ここで、牡丹委員長から副委員長へ木の移動経路の指示がなされ(415)、副委員長がこれを委員長に確認する(416)と、委員長が頷く(417)。副委員長の指令(422)・号令(425)により再度移動が開始されるが、これに対し元会の引き手たちは

勢い良くロープを引きながら走り始め（426）、そのまま引き続ける（427）。目の前を通過していく元会たちに向かって、委員長が「止まれ:」と制止をかけ（428）、一人の身体を掴んで止める（430）。

このシーンは、この日12:30頃に開始された里曳きのゴール直前の集合地点であり、時間的には15:30頃である。山の上からお神酒を飲みながら降りてきた引き手たちはかなり酩酊している。特に経験の浅い25歳元会メンバーは副委員長の指示に反応しにくくなっている。副委員長の掛け声が待たれずに次の行動が開始され、木が急激に動く。一方、委員長と副委員長が同じ指令を実施するのであれば、委員長の方に普段は指揮権がある。この場面でも副委員長は委員長に木の移動先を確認しており、委員長はこれを支持している。さらに、牡丹委員長は委員長を補佐する立場にある。こういった状況から、急激な木の移動に対し、これを案じた牡丹委員長、委員長がともに引き手たちに直接制止をかけ、局所的に全体の指揮権を取得している。

3.3 移譲される指揮権

最後に、指揮権が他者に委ねられる事例をみる。

断片7は1月の里曳き、委員長組である。主たる引き手は郷愛会である。手前に駐車場がある曲がり角を曲るときに、委員長が「危ねかったら止まれ:って(.)誰でもいいからせ言ってくれ」と言う（501）。これに対して引き手たちは「あ:い（502）」と答えながら笑う。一人が「ぶつかった:でいいんか:?」と言っている（504）。

【断片7】
501 委員長: それで:(0.3)ここ回っていくんだけ
車ちょと飛び出てるから:(0.3)
危ねかったら止まれ:って(.)
誰でもいいからせ言ってくれ
502 郷愛一同: あ:い<笑>
503 郷愛１: よっしゃ
504 郷愛２: ぶつかった:でいいんか:?
505 委員長: ぶつかった:はダメだ
506 郷愛一同: <笑>

指揮の権限を持たない引き手たちに「止まれ」の指令が言いづらいことが分かる。そこで、事実の報告として「ぶつかった」という発言で良いかと聞き直しているのであろう。

4. 考察

本研究では、大人数の参与者が巨大な対象を一斉に操作しなければならないという状況において、指揮者の権限がどのように尊重・介入・移譲されるのかをみてきた。

事前に与えられた一人の人間への権限だけでは、木を移動させていく過程において生じる様々な障害を乗り切ることはできない。断片2, 3では、元来の指揮者に対して、今必要な指示を行うよう周囲の人が指摘することをみた。断片5, 6 では、元来の指揮者が指揮を遂行しきれていないとみるや、他の者が指揮を代行することをみた。これらの事例に共通していることは、指摘や代行を行う人間も相応の立場の者であるということである。断片2では、現委員長の補佐役である前委員長、断片3では次期副委員長が指摘を行っている。また断片5では次期委員長に対して現三夜講トップの委員長、断片6では副委員長に対して前委員長と委員長が代行を務めている。これに対して、最後にみた断片7では、そういった権限を持たない郷愛会の引き手たちに、「止まれ」という指揮権を持つ人間が行うべき発言が委ねられたため、「止まれ」ではなく「ぶつかった」という事後報告でいいかという形でこの移譲がさりげなく断られている。

これらの分析から、総じて、ある目標に向かって一連の行為を大勢で遂行していかなければならない大局的構造の中で、局所的な指令や号令は、指揮権を持つ人間とそれに次ぐ人間との相互行為によって達成されていると結論づけられる。

■謝辞 本研究は、国立情報学研究所共同研究（戦略研究公募型）「非成文化惣コミュニティ文化の伝承を支える世代間協働インタラクションの理解」（代表：榎本美香）からの助成を受けています。

参考文献

Austin, J. L. (1962). *How to Do Things with Words.* London: Oxford University Press.

榎本美香・伝康晴(2013). 文化伝承を支える多世代協働インタラクションにみられる「指揮」と「指導」の分析 日本認知科学会第30回大会発表論文集 pp. 122–131.

Searle, J. R. (1969). *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language.* Cambridge: Cambridge University Press.